翻　訳

社会学シンポジウムでのスピーチ[1]

胡　喬　木[2]　談
星　　明　訳

〔訳者まえがき〕

この訳稿は，1979年3月16日，全国哲学社会科学企画会議設立準備処の名義で召集された社会学シンポジウム（社会学座談会）[3]での胡喬木のスピーチ（講話）である。このスピーチは，中国で社会学が回復するためのもっとも重要なスピーチの一つである。他の一つは1979年3月20日，鄧小平が党の理論工作務虚会（検討会）で行なった「四つの基本原則[4]を堅持する」というスピーチのなかでの「政治学，法学，社会学および政界政治の研究を，われわれは，過去長年ないがしろにしてきたが，いまいそいであらためてやり直さなければならない」という発言である。

建国後，約30年にわたって禁止されていた社会学の回復には，党と国家の最大の政治権力をもち，改革・開放の総設計師と称される鄧小平と中国の社会科学界で最高の権威をもつ中国社会科学院長胡喬木の承認と支持が中国では不可欠であった。

胡喬木は，再び社会学を研究することに対して社会学者がもつ恐怖心を払しょくすることを目的とし，かつて党が社会学を乱暴なやり方で禁止したことの誤りを認め，社会学の名誉を回復させた。ここから，中国の社会学の再建がスタートした。社会学の教育と研究がはじまり，全国規模の社会学会が成立し，中国社会科学院社会学研究所が設立し，上海大学，南開大学，中山大学，北京大学に相次いで社会学部が創立されたのである。

ここに訳出したのは，中国の社会学の再建という重要な画期となるスピーチである。

社会学シンポジウムでのスピーチ（胡喬木）

本日，この会議に出席している圧倒的多数の同志は社会学の大先輩であります。過去にみな

さんの著作を読んだことがありますが，お目にかかったことはありませんでしたし，一部のひとはただお名前を存じているだけですし，また今日はじめて知ったひともあります。わたしは門外漢なので，社会学それ自体については話すことができません。

今日のわたしのスピーチは費孝通同志の招請を受けたものです。というのも，わたしもかつてたびたび，直接かれに，またほかの社会学の先輩にも社会学の研究を回復させるべきだと提起したことがあります。孝通同志にわたしは，回復にはまだ多くの困難があるので，これらの困難を克服するために，応援の話をしてくれないかと求められました。わたしは考えたうえ，社会科学研究機関の責任者の義務として，応援しなければならないと思いました。

社会学が中国でどのように迫害を受け，禁止されたかについて，わたしはこの経過を間違いなく理解しているわけではありません。ここ一，二年なにがしかの情況を聞いたことがありますが，やはり非常に不正確です。要するに，社会学が一つの科学であることを否定し，そのうえ非常に乱暴なやり方でこの学問の中国での発展，存在，伝授を禁止しましたが，これは完全に間違ったことでありました。どのような観点からいってもすべて誤りでありました。すなわち，科学的，政治的観点からいっても，このようなやり方や措置をとったことは，社会主義の根本原則にも，社会主義の科学的原則にも，そのうえ社会主義の政治原則にも反するものであります。社会学の存在，教育，発展を禁止したことに関しては，政治的には完全に誤りでありました。この点を，わたしは多くを語りたくありません，多くを語るまでもなく，この道理については，みなさんすべてがわかっていることであります。これは社会主義社会が科学を発展させる方針と，また科学を発展させる中国共産党，毛沢東同志の方針と完全に逆行しています。科学的な面から，いいかえれば，この研究分野の存在を禁止し，理論的にこの研究を否定したこと，これは科学的な視点からみれば，完全にとおらないし，完全に成り立たないし，まったく理屈にあわないことだとわたしは考えています。

社会は科学研究の対象であります。社会生活，各種の社会現象，社会生活の各方面の相互関係，社会生活の発展，これらはすべて社会科学の研究対象であります。もしこれらを研究しなければ，社会科学であるとはいえず，社会科学は存在の可能性がありません。マルクス主義は社会科学以外の対象も研究するが，しかしまずマルクス主義は社会科学であることを認識しなければなりません。この意味からいえば，マルクス主義は科学であって，その第一の研究対象は社会であります。

マルクス主義の一部の先駆者たちは社会学という用語に言及することも，用いることもありませんでした。レーニンは社会学という用語を使用し，マルクス主義の史的唯物論はマルクス主義の社会学そのものであり，史的唯物論は社会生活，社会現象，社会発展を研究するものであり，この広範な研究範囲のなかの，もっとも基本的な観点と原則だと主張しました。しかし，このようなレーニンの話を引用して，史的唯物論があれば社会科学に関する研究は不必要であるいう見解にはわたしは賛成できません。このような考え方は完全に間違っていると思います。

史的唯物論はわたしたちに多くの，社会生活，社会発展の多様な側面および悠久な歴史を研究する基本的な観点，基本的な方法，基本的な法則を提供してくれます。しかし，史的唯物論それ自体が社会の各方面の現象について具体的に研究する科学に取って代わることは決してありませんし，またそれを意図してもいません。史的唯物論もこのような科学の一つであるからです。この点はなんの説明も必要ないし，少し史的唯物論を理解しているひとならだれでもこのことをわかっています。

史的唯物論の対象は社会科学全体の対象と同じではないし，また社会学の対象とも同じではありません。史的唯物論があれば，必ずしも社会学の問題が解決できるわけではありません。したがって，史的唯物論を研究することと社会学を研究することとはイコールで結ぶことはできません。史的唯物論は生産力，生産関係間の関係に着目し，生産関係を経済的基礎として，また上部構造という比喩的なことばを用いて，この経済的基礎が上部構造を決定すると主張します。これは人類の科学の歴史のうえで，非常に偉大な貢献をしました。しかし，われわれはマルクスやエンゲルスの著作およびレーニンの著作からも次のような見解をみいだすことはできません。つまり，社会生活のすべての現象はこの概念のなか，およびこのいくつかの概念の相互関係のなかに，このいくつかの関係とこのいくつかの概念に余すところなく包含されているという見解です。マルクス，エンゲルスそしてレーニンのだれもこのようにいっていません。これは理にかなっています。もともと客観的事実はこのようです。史的唯物論の本来の仕事は社会生活のありとあらゆる現象および各種の発展を研究することではありません。したがって，史的唯物論は，ほんらいわれわれが社会について研究する各科学を助けることにあり，それらの科学に取って代わるものでも，それらの科学を阻害するものでもありません。当然，それらの科学を禁止することなど問題外であります。

自然現象について，マルクスとエンゲルスはわれわれに哲学的な解釈を与えたし，提起しました。しかし，マルクスもエンゲルスもかれらの自然現象に関する哲学的な解釈は各自然科学に取って代わることができると語ったことはありません。このような見解を話したら，マルクス主義は科学として成立できなくなります。マルクスやエンゲルスがこのようなテーゼや見解を提出することはありえないことであります。

社会科学の分野においてもまたこのようであり，史的唯物論は社会に関するさまざまな科学に取って代わるものではありません。それはありえません。史的唯物論はわれわれに方法を与えました。この方法とはたったいま話しました社会現象を観察する方法です。うえで提起したこの問題は，確かにわれわれが社会生活の発展のなかの基本的な問題だと考えています。しかし，このことはこれによって社会科学がここに至って停止するとか，ここで発展しないとかといっているのでは決してありません。もしこのように理解したら，マルクス主義は科学ではなくなってしまいます。この方法はただ発展する社会を科学の対象として研究するためのものであって，この研究を停止させるものではありません。さきほど生産力と生産関係，経済的土台

と上部構造およびここから派生してくる現象，概念について話しましたが，これもまた社会生活のすべてではありません。したがって，マルクスは生産関係と社会関係を繰り返し区別したし，マルクスはこれまで生産関係が社会関係の全体と等しいとは考えていませんでした。社会関係がどのような内容をもち，どのような法則をもっているかについて，マルクスは多くを語っていません。というのも，かれの仕事はこの範囲にないからです。だから，われわれは生産関係をはっきりさせることが非常に重要ですし，それは社会生活を理解する鍵です。しかし，この鍵があることは社会生活すべてを生産関係の概念のなかに取り入れることと決して同じとはいえません。これはわたし個人の理解であり，もしかしたらわたしの理解はまちがっているかもしれません，どうかみなさんご指導をお願いします。わたしは，マルクスは決してこのようにいっていないと考えています。マルクスがいったのは，生産関係は社会生活にきわめて大きな変化を引き起こす根本的な要因である，ということです。したがって，わたしがさきほど話しましたが，史的唯物論に関するマルクス主義の学説は，決して社会を科学研究の対象から排除するものではないし，マルクスとエンゲルスはその学説は社会を科学としてあますところなく研究するものではないと考えました。マルクスはこのような研究をしませんでした。ただ社会の発展のもっとも重要な原因について，もっとも根本的な解釈を行なっただけです。しかし，社会生活はとても複雑であり，社会現象もまたとても複雑です。社会関係の核心は生産関係です。しかし，社会関係は生産関係と同じではありません。したがって，われわれは史的唯物論を認め，受け入れましたが，われわれが社会学およびその他の社会科学の研究を否定することとは決して同じではありません。それぞれの具体的な社会科学はやはり専門的に研究されなければなりません。マルクスは経済学者です。かれは史的唯物論があれば，経済学を研究しなくてもよいとは考えていませんでした。逆に，かれはほとんど終世，精力的に経済学を研究しました。しかし，社会生活は単に経済生活だけではないので，マルクスがまだ研究していないものがありますし，そのうえ一個人があらゆることをすべて研究しつくすことは不可能です。マルクスがすでに研究したものもわれわれは研究を継続しなければなりません，科学研究は停止することができませんし，その研究を継続させなければならないからです。マルクスがすでに研究したものも研究を継続しなければならないし，マルクスが研究していないことも当然，さらに多くの力量で研究して行かねばなりません。

確かに，われわれの多くの同志のなかには一つの疑問があります。それは社会現象には生産力と生産関係，経済的土台と上部構造のような概念が存在する以上，社会現象はすべてこれらの概念によって分類，類別すべきだと考えるからです。たとえば，先ごろ，ある一人の同志と，研究・教育は結局のところ上部構造に属するか，経済的土台に属するか，それとも生産力に属するのかなどと話し合いました。わたしはこれらの問題は，その他の領域のなかにもあると思っています。たとえていえば，さらに一人の同志がわたしに，体育界には一種の論争がある，すなわち体育は上部構造であるかどうか，ということを聞いたといいました。わたしはこの問題

は，問題そのもののもちだし方がまちがっているので，回答できないと思っています。これは一切の社会現象はさきほど話したいくつかの概念によって類別できることを仮定しており，正確な回答が一つしかないという考え方です。わたしは，マルクスは非常に勇敢なひとであり，また別の面では非常に慎重なひとであり，非常に厳格なひとだと思っています。かれはこのようなことばを語ることはありませんでした。かれの史的唯物論についての研究と企図は一切の社会現象を含くむものではありませんでした。わたしのこの話はマルクスのことばを歪曲しているでしょうか？そうではないと考えています。マルクスのことばは本のなかに書かれているので，みなさんだれもがみることができます。

なぜこのような論争があるのか，それはマルクス主義に対する誤解です。社会科学が前進するために，もしこの種の誤解を解かなったら，われわれは前進することが非常に困難になり，無益な論争に多くの時間を浪費し，そのうえ，無益な論争は結果をもたらすことができません。それは無益な争いよりさらに悪いかもしれません。意味のない問題を論議することは無益ではあるけれども，おもしろいことかもしれないし，はなはだしく悪いことではないかもしれませんが，当然時間をむだにします。かつまたこの論争は無益であるだけでなく，しかも科学が発展する道筋を歪めてしまいます。これは多くの科学の発展を不可能にしてしまいます。これはマルクス主義の陣営をしっかりと守ることになるでしょうか？ありえないことです。というのも，このような論争はマルクス主義の観点から離れてしまうからです。

マルクス主義の観点からこれらの問題を討論してもいいですが，上述のような方法や質問の仕方で問題を討論することはよくないと思います。

生産関係は社会関係と同じではなく，すべての社会関係を含むことは不可能です。この点は非常にはっきりしており，異論がないと思います。これと同様に，史的唯物論も社会史と同じではなく，またひいては社会発展史とも同じではありません。われわれは社会史を研究しなければなりません，というのも社会史と社会発展史は二つの科学ですので，同列に論じることはできないからです。

社会史は非常に繁雑で，非常に難しい科学です。史的唯物論はその名の示すとおり，社会史を説明することではなく，社会史を研究する方法を提供するものであり，決して社会史という学問それ自体と同じではありません。社会史を研究することは非常にひたむきな努力をし，多くの資料を収集しなければならないし，多くの問題にでくわすでしょう。これらの問題は史的唯物論を学んで身につけることですべて一刀両断に解決できるのでしょうか？わたしは恐らくこのようにいえないと思います。マルクスやエンゲルスもこのようにいっていません。社会史の研究課題は非常に多く，また解決が難しい多くの問題，非常に繁雑な問題が，われわれのまじめな研究，検討をまっています。完全に科学的態度で，事実に基づいて詳細に研究しなければなりません。

マルクスとエンゲルスは，かれらが当時理解しえた社会科学の研究に基づいて，いくつかの

判断を下しました。しかし，社会科学の研究も発展し続け，決してマルクスとエンゲルスが判断を下したところで発展は止まっていません。まさに自然科学と同じように，マルクスとエンゲルスもいくつかの判断を行なったが，エンゲルスはより多くの判断を下しました。しかし，これらの判断があるために，自然科学が発展しなくなったり，あるいは完全に必然的にマルクスとエンゲルスの判断どおりに発展したりしたわけではありません。これはありえないことです。われわれはこのように哲学者（マルクスとエンゲルスを指す）に要求することはできません。当時は，多くの現象はまだ発見されていませんでした。たとえていえば，エンゲルスはタンパク質が生命の基礎だといったが，のちにそれはリボ核酸であることが発見されました。これがどうしてエンゲルスはリボ核酸が生命の基礎であることを発見できなかったと責めることができるでしょうか？このような責め立ては自分の愚かさであり，このような責めは意味のないことです。社会科学の側にもこのような現象があります。かれらが当時，みることができた材料には限りがありました。非常に博学な学者が，どのように博学であろうとも，過去，現在，未来のすべてを，さらには地球以外の事情のすべてを知る尽くすことはできません。したがって，ある一部の問題はもしマルクスやエンゲルスが行なった判断にこだわりすぎるならば，われわれの科学研究のなかで自分から招いた困難に遭遇し，自分で悩みごとの種をつくることになります。これはマルクス主義ではないし，マルクス主義の研究態度でもありません。当時，一部の問題については，当時マルクスとエンゲルスも把握していました。にもかかわらず，われわれはマルクスやエンゲルスに中国の歴史について十分な説明をすることを要求することはできません，そうであれば，中国人の存在の価値はどこにあるのでしょうか。かれらは中国語を学んだことがないし，それほど多く中国に関する書籍も読んだことがありません。したがって，一部の提起のしかたはかれらが理解した範囲内のことであり，ただかれらが理解した範囲に照らして構想を提出したにすぎません。少しの疑いもないことは，これらの構想はわれわれに非常に貴重な助けを与え，これはその他の多くの科学者がわれわれに与えてくれたものを超えるということができます。しかし，マルクスとエンゲルスに全知全能であることを要求することはできません。わたしは多くの問題を研究してきたわけではありませんが，たとえば，原始社会については，モーガンの判断が真理に決着をつけたと考えて，エンゲルスの判断も真理に決着を付けたといえるでしょうか？いえないでしょう。われわれはやはり研究を継続しなければなりません。モーガンやエンゲルスがこのようにいったので，われわれも事実を離れてかれらのように話さなければならないということはできません。やはり，われわれは事実に照らして，われわれが発見した事実によって発言すべきです。マルクス主義はわれわれに社会科学研究の一つの方法を与えてくれました。毛沢東同志はつねにマルクスとエンゲルスの立場，観点，方法を学習すべきであるが，しかしどれかの一つの論断に固執してはならないといいました。かれらがすでに研究した課題についてこのような態度をとるべきであり，かれらが研究しなかった課題についてはさらにこのような態度をとらなければなりません。

社会学の現代の発展について，われわれは社会学を科学的態度で扱わなければなりません。社会学が客観的事実と一致すれば，科学となり，客観的事実と一致しなければ，ただ仮説にすぎません。それをわれわれは仮説だと認識すれば良い。このようにしてこそはじめて，われわれが社会学の現代の発展に対して取る態度が科学的になります。疑う余地はないことは，現代の社会学はその内容があまりに多すぎ，わたしは専門家のふりをすることができません。わたしにはどんな研究もありません。今までの研究にはきっと正確なものもあるし，不正確なものもあるでしょう。結局のところ，科学はこのようであります。私たちは，現在，現代の社会学の研究のすべてが真理であるということはできない，ちょうど社会学のすべてが真理でないというのと同じです。これはまさにわれわれが一生懸命研究すべきところです。いかなるひとの研究に対しても，自らの研究に対してさえも，すべてこのような批判的態度をとらなければなりません。それでこそはじめて前へ進むことができるのです。

いま話したことは，われわれが社会学に対処することを話したにほかならず，マルクス主義があるがゆえに，社会学を否定すべきであるといっているのではありません。マルクス主義はわれわれが社会学を研究することを助けるものです。現代の社会学のなかには正確なものも，また不正確なものもあります。自らマルクス主義と称するかどうか，あるいはマルクス主義と呼ばれかどうかにかかわらず，すべて厳格な科学的観点で分析しなければなりません。社会学の学説，方法，さまざまな観点と，われわれの研究の結果，仮設との間には関連があるが，しかしまた完全に分けることができないものでもありません。われわれは，やはり分析的方法をとらなければなりません。そうすることで，われわれは現代の社会学が提起する各種の観点，各種の理論，各種の方法，各種の知識に対して，はじめて客観的な認識をもつことができるのです。

資本主義社会あるいは資本主義社会以前の社会，ひいては原始社会には，すべて社会学の課題があります。資本主義社会にはさまざまな社会問題がありますし，社会主義社会にもやはり社会問題があります。社会学の方法で研究すべきです。われわれは資本主義社会および社会主義社会のさまざまな問題を研究することが必要です。社会生活のなかの問題は，資本主義から社会主義に発展したことによって，社会は問題をもつ社会から問題のない社会へ変わることは決してありません。問題は矛盾なのである。毛沢東は，社会主義社会にもやはりその矛盾があるし，やはりその問題があることを繰り返し主張してきました。毛沢東同志は，社会主義社会のなかには敵対的（敵味方の間の）矛盾と人民内部の矛盾の二つの種類の矛盾があることを打ちだしましたが，これはわれわれに重要な啓発，非常に重要な方法を与えてくれました。しかし，このことばを理解しただけでは社会主義社会の問題を理解したとはいえません。やはり，われわれはさまざまな問題を研究することが必要です。社会問題を敵味方の間の矛盾と人民内部の矛盾という二つの矛盾に分けただけでは，決して問題解決につながりません。依然として，労働問題，人口，文化，道徳，民俗，民族，女性，青年，児童，高齢者，都市，農村，職業の

分業などの問題があります。これらの問題はいずれも専門的な問題であり，すべてちょっとした簡単なことばで，またいくつかの簡単な理論で解決することはできません。マルクス主義はこれらの問題に対してすべていくつかの観点，いくつかの論断を示してきました。しかし，マルクス主義もこれらの問題に対する全面的，周到的，科学的な研究に取って代わることはできません。

マルクス主義は，社会主義社会あるいは資本主義社会のさまざまな現象，さまざまな問題を研究するために方法を提供しましたが，これは社会主義社会あるいは資本主義社会を研究する時，マルクス主義以外の方法がないということを意味しません。つまり，マルクス主義がすでに社会（社会主義社会および資本主義社会を含む）を研究する方法を言い尽くしたことではありません。それもありえないことです。研究方法も発展することが必要です。マルクス主義はいくつかの根本的な問題についてわれわれにいくつかの根本的な方法を与えてくれましたが，しかし，具体的な問題を研究する時，やはりなんらかの具体的な方法に依拠しなければなりません。たとえば，ある数学者が数学を習得したと同時に弁証法を身に着けたが，しかし弁証法はかれの数学の演算に取って代わることができるだろうか？もしこのようにすれば，かれは数学者にはなりえないし，数学の仕事は止まってしまうだろう。数学の演算の方法，数学の証明の方法はやはりその特有の方法があります。これらの特有の方法も歴史的に次第に発展してきたものです。マルクス主義もこれらの方法を排除することはできません。だれかがこのような方法を排除しようとすれば，これはそのひとの愚かさを証明することになり，頭脳明晰なマルクス主義者ということができません。社会科学の研究方法，たとえば統計学がマルクス主義の方法であるか，それとも反マルクス主義の方法であるかという判断は難しいです。これについて，われわれはここで詳細な比較，細心の討論を行なうつもりはありません。レーニンは，多くの社会統計はいくつかの社会現象の本質を覆い隠したといいました。しかし，レーニンは社会統計がすべて偽物であり，社会の本質を覆い隠したものであるとはいっていないし，また社会の本質を覆い隠した統計方法を必要としないとか，発展させるべきではないとかいっていません。したがって，統計学についてのレーニンの一部の批判を，統計学を徹底的に否定するものとしてもってくることはできません。もし統計がなければ，ただ社会学のみならず，各社会科学，多くの社会科学がすべて研究しがたくなります。

したがって，われわれは現在の社会学の研究のなかで用いる方法に対して，批評を提起することができます。しかし，これらの批評は確実で，科学的で，制限があるべきです。すなわち，無制限な断定を勝手に下してはなりません。一切を否定すること，一切を肯定すること，これはいずれも間違いを犯しやすい。恐らく現在の問題は，われわれが20世紀の後半から発展してきた多くの方法について，あまり熟知していないことにあります。われわれはこれらの方法を学ばなければなりません。たとえその方法を批判したくても，まずその方法を研究しなければなりません。わかっていることさえも，みなわかろうとせず，いきなりあれこれと批評を提

起することは，科学的意味をもつものになりがたいです。

われわれは現代の社会学的研究に対して，社会学が蓄積した大量の知識について真剣に研究する必要があるだけでなく，社会学が用いる方法についてもまたまじめに研究する必要があります。研究し，深思熟慮を経てから，マルクス主義的な批判をしても差し支えありません。現在の危険は，われわれが知らないこと，知っていることが非常に少ないことです。したがって，われわれはやはり現代の社会学の研究が蓄積してきた資料や社会学が用いる方法をまず把握しなければなりません。研究し，研究の後に再び分析を加えなければなりません。理解しなければならないし，学習しなければなりません。社会学を理解し，研究するために，社会学界の多くの同志は，社会学研究会の成立を準備しています。わたしはこのような努力をとても歓迎していますし，できるだけ応援したいと思っています。研究しなければならないことはとても多い。多くの実証的な課題もあるし，またいくつかの理論的な課題もある，いずれも研究しなければなりません。社会の需要と早く研究の成果を示すことからいえば，実証的な研究がより重要であるので，まず重視すべきだと思います。しかし，理論的研究を放棄し，無視すべきだと考えていません。

われわれが最大限の努力を払って，わが国の目前の問題，事実およびさまざまな社会現象を研究し，対策を提示することは，科学者として，国民としての職責だと思います。同時に，われわれはまた外国のことも研究する必要があります。外国を研究することは，われわれより外国の社会学の研究が発達しているからだけではありません。いうまでもなく，外国において社会学研究が盛んに行なわれてきたが，われわれは社会学研究を行なわなかった。これは事実です。もしこのような事実を認めることができなければ，社会学研究を行なうこともありえない。われわれの研究は，外国の研究の成果や方法を参考にしなければならない。外国の社会学者が研究のなかで示した観点について，われわれも研究・分析をとおして，参考にする価値があるものは何か，価値がないものは何かを判断すべきです。これは私たちが直面している課題です。研究せずに大胆に判断を下せるだろうか？ただ，科学の歴史をみればよくこのようなことが起きます。つまり，一部の研究は実際には有益な結果をもたらさない無意味なものである。社会科学はこのようであり，自然科学もこのようであります。一部の研究は誤った方法によって誤った結論をえた。それゆえ，われわれは迷信的な態度をとってはいけない。もし迷信的な態度をとるならば，どんな科学にかかわらずすべて危険です。どうしても研究しなければならないし，判断しなければなりません。われわれは迷信にとらわれないが，迷信の問題を研究することができます。われわれは雷鳴にはなにか雷神がいるということを信じないが，やはり雷鳴を研究することができます。われわれは宗教を信仰しないが，中国や外国の宗教についてやはり研究することができます。宗教を研究する時，宗教を一つの課題としてあつかうだけでなく，宗教の宗派も研究しなければなりません。つまり，われわれはいかなる科学に対しても，すべてその科学の各方面を研究しなければなりません。

社会学研究会を設立することについては，わたしはまったく賛成である。しかし，ただ研究会を設立するだけではいけない。ご在席の大先輩はほとんど80歳を超えています。年齢が比較的若いひともおられるけれども，すべて高齢の方々です。だから，ぜひとも後継者問題を解決しなければなりません。ある同志は「後継者」ということばは非科学的なものであり，妥当でないと語っていますが，われわれはこの議論に関心がありません。重要なのは後継ぎを養成することです。科学的な観点からいえば，後継者ということばを使っても妥当だと思います。くだらぬ問題で悩む必要はありません。自分自ら，あるタブーを打ち破ってはまたあるタブーをつくっていますが，必要のないことです。結局，はやく弟子を養成しなければならないし，学生を教育しなければなりません。すなわち，大学のなかに社会学部を復活させなければなりません。全国の総合大学ですべて同時に設置できなければ，条件がそろったところから先に設立すれば良い。出席者のなかに教育省の同志はいませんか。この件についてご協力をお願いします。もしいまから準備をはじめれば，今年7月以後社会学部を設置する可能性があります。いまから努力しないなら，社会学部が設置できるかどうかは問題になってしまいます。現在，多くの同志はみな年老いています。この会議が終了してから一部の大学に社会学部を設置するまでの期間中に，ご在席のだれかの追悼会を開くことのないよう願っています。だから，今日ご在席のみなさんはお体を大事にしてください。科学研究の継続のために，ご自愛ください。そうでなければ，これは個人や家族の損失だけでなく，社会の損失でもあります。したがって，大学院生を養成する必要があります。社会学部をもつだけでなく，さらに社会学の大学院生クラスに力を入れなければならないし，大学院生を養成しなければなりません。これらの活動を発展させると，ある困難にぶつかる可能性があり，困難は少なくないでしょう。この面の困難については，また一種の社会現象でもありますし，また社会学の一つの研究対象でもあります。しかし，この対象を研究するのに時間をかけず，困難が克服されることを願っています。みなさんがこれらの困難を克服することに一致協力すれば，進歩できるでしょう。もし研究所を開設するとすれば，中国社会科学院に社会学研究所を設置する必要があります。民族学院を含む一部の条件が整った大学でも研究所を設置する必要があります。そのうえ，今日，参加したひとがこのように多いことから，ひとが少なくないことが明らかであり，やはり仕事は大いにやりがいがあります。

現在，わが国の社会学の研究の力量はアメリカ，ソ連と比べることはできませんが，しかしそれはたいしたことではありません，ことの成否はひとのやり方いかんで決まり，ゆっくりと追いつけば良いのです。立ち遅れているものはとても多く，たんに社会学だけではありません。したがって，ただ立ち遅れだけを強調することは，無益であり，良い結果につながりません。やはり努力が大切です。

昨年，すでに社会学研究の回復が提起されました。現在，わたしは自己批判をしています。つまり，わたしが今日話したような話は，昨年，話すべきでした。今年のわたしは，社会学に

関する研究は進んでおらず，時間を無駄にしました。時間を無駄にしたが，いま後悔しても意味がありません。目下，重要なのはあらゆる懸念を抱かずに早く社会学の研究を回復させることであります。科学研究はたとえ条件がすべて順調であっても，並木道を散歩するように軽快なことではないし，すべて絶えず困難に打ち勝たねばなりません。以前起きたようなことは再び繰り返えすことはありえません。わたしはかつていってきたが，林彪，「四人組」のような特殊な歴史現象は過ぎ去ったことであり，二度とやってこないし，繰り返えすことはありえません。ある同志はこの保証は早すぎると批判しました。これらの批判はまことの好意であるため，わたしは感謝しています。しかし，わたしはやはり歴史は後退するはずがないと信じています。永遠に後退するはずがないといっているのではありません。かつて後退したことさえあったが，しかし後退後は，あのような後退を再び繰り返すことはないと信じています。過去にでくわしたあのような後退を再び繰り返すことはありません。これは勝手な判断ではなく，深思熟慮をとおしていえることであります。歴史的な条件にはすでに根本的な変化が生じました。過去にかつて存在した歴史的条件が繰り返してあらわれることはありません。みなさんはまったく安心して大胆に活動に励むことができます。わたしは社会学の研究が発展するためにみなさんをそばから応援したく思っております。

〔注〕

(1) 胡喬木，1979年3月16日，「胡喬木同志在社会学座談会上的講話」。韓明謨によれば，このスピーチの大意はすでに，1979年第3期『哲学研究』に発表されているが，ここでの文章は記録した全文であると記している（韓明謨，2002年，「胡喬木同志在社会学座談会上的講話」，韓明謨，2002年，『20世紀百年学案・社会学巻』所収，pp.297-308）。

(2) 胡喬木（1912－1992）について，『岩波　現代中国事典』から一部抜粋して紹介しておきたい。胡は「党の保守派イデオローグで理論部門の指導者の一人。中央政治局委員を務める。……清華大学，浙江大学に学ぶ。……30年共青団加入。32年中共加入。……41年以降，毛沢東の秘書，党中央政治局秘書。……48年以降，新華通信社長。建国後，新聞総署長，党中央宣伝部副部長などを歴任。54年党中央秘書長として，最初の憲法起草に参加。『毛沢東選集』第1－4巻の編纂作業に参加。文革中，迫害を受ける。75年国務院政治研究室責任者。77年以降，中国社会科学院長，党組書記，毛沢東著作編纂弁公室主任，中央文献研究室主任などを歴任。78年7月毛沢東型の経済運営からの転換を理論的に正当化する論文「経済法則に照らしてことを運び四つの近代化の事業をはやめよう」を発表し，改革・開放を積極的に推進。……78年11期第3中全会で中央委員，中央副秘書長。80年11期第5中央書記処書記。81年「歴史決議」（正式には，「建国以来の党の若干の歴史問題に関する決議」（文革を否定し，毛沢東の歴史的評価を行なった決議で，建国以来の路線問題などに評価（歴史問題，文革評価，毛沢東評価）を下し，その後の展望を開く重要な決議となった）を起草。82年12期中央政治局委員。87年13期中央顧問委常務委員。……。）（『岩波　現代中国事典』，1999，p.326,pp.1313-1314）

(3) このシンポジウムに至る経過およびその成果については，韓明謨著（1987）・星明訳（2005），『中国社会学史』，行路社の「社会学の回復」（pp.206-214）を参照されたい。

(4) 四つの原則とは「社会主義の道」，「プロレタリア独裁」，「共産党による指導」，「マルクス・レーニン主義と毛沢東思想」を指す。

〔謝辞〕

この翻訳にあたっては，佛教大学社会学部の張萍教授および元中国社会科学院博士生指導教授の張琢教授からご指導や指摘をいただいた。記して，感謝申しあげます。

（ほし　あきら　元現代社会学科教員）

2019 年 10 月 31 日受理